

【警報発令中】 伝染性紅斑が流行しています

【概況】

2024年第48週(11月25日～12月1日)の定点あたりの患者報告数^{※1}は、市全体で **2.45** となり、警報発令基準^{※2}(2.00)を上回りました。2018年以来の流行です。

患者の年齢構成は、**4～5歳**を中心に報告が多くなっています。

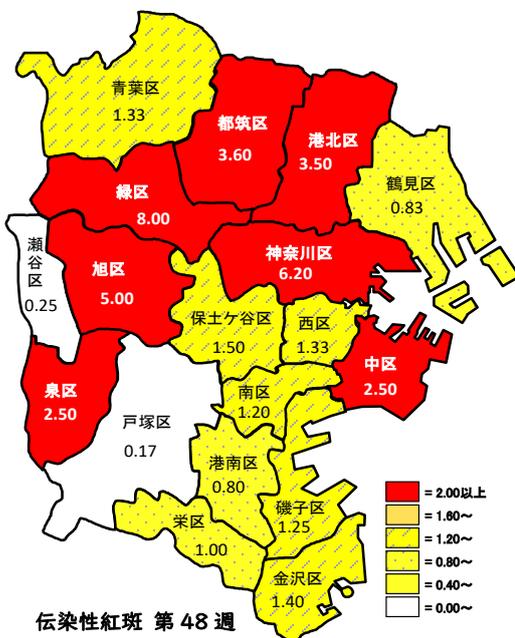
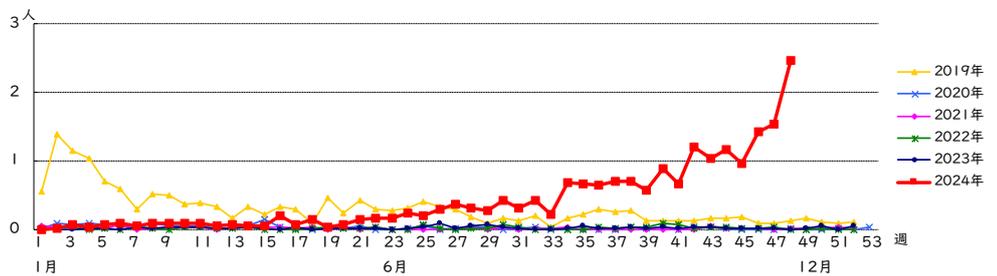
※1 定点あたりの患者報告数とは、1週間に1回、定期的に患者発生状況をご報告いただいている医療機関(伝染性紅斑は小児科定点94か所)から報告された患者数の平均値です。

※2 警報は、終息基準値(伝染性紅斑では1.00)を下回った場合に解除となります。

【市内流行状況】

2024年5月中旬以降増加傾向となり、特に8月下旬以降は例年よりもかなり多い状態が続いています。11月下旬(第48週)に2.45となり、流行警報発令基準値(2.00)を上回りました。

患者の年齢層は、4～5歳が中心で全体の33.5%を占めていますが、小学校低学年相当の報告も多くなっています。



伝染性紅斑とは

ヒトパルボウイルスB19による感染症で、両頬がリンゴのように赤くなることから、「リンゴ病」とも呼ばれています。春から初夏にかけて多く発生します。かぜ様症状から7～10日ほど経過すると、両頬に紅斑(皮膚が赤くなる)が現れ、続いて手足に網目もしくはレース状の紅斑が現れます。



国立感染症研究所 HP より

小児を中心に流行する症状の軽い感染症ですが、妊娠初期に感染すると、流産や胎児に異常を起こすことがあります。また、感染していても症状が出ない不顕性感染の人が25%程度います。

感染経路は、飛沫感染(咳、くしゃみなど)、接触感染(感染者の飛沫などに触れた手で、口や目などの粘膜を触ることによる)です。予防には手洗いと咳エチケットが重要です。**アルコールが効きにくい**ため、日常的に触れるおもちゃなどの環境消毒には、次亜塩素酸ナトリウムを用います。

登校(園)基準

「学校において予防すべき感染症の解説」では、発しん期には感染力はないので、発しんのみで全身状態の良い場合は登園・登校が可能とされています。

(※ 感染力があるのはかぜ様症状の出ている時期で、発しんが出た時にはほとんど感染力がありません)

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045(370)9237
横浜市医療局健康安全課 TEL 045(671)2463